

ひたちなか 埋文だより

43



三反田蜆塚貝塚の土製腕輪Ⅱ 白井克夫さんに寄贈いただいた三反田蜆塚貝塚の採集資料に、土製の腕輪が含まれていました。三反田蜆塚貝塚では、13個ものベンケイガイ製の貝輪を、左腕に装着して埋葬された人骨が検出されています。この土製腕輪は、そのような装着の状態を模倣したもののなのでしょう。刺突文のある隆帯が貼り付けられていて、装飾が縄文時代後期の土器に共通します。この隆帯が、土製の加飾にすぎないのか、あるいは紐で組むようにして貝輪が連ねられていたのを真似たのか、気になるところです。(2015.8.21 寄贈, 2015.8.25 撮影 博物館実習「女子大生と装身具」第6弾)

CONTENTS

私たちも虎塚古墳を守っています—中根地区ときわ会の清掃活動—

【出会い、別れ、そして夢考古学の旅路】 第15回 岩瀬町の遺跡の調査 (川崎純徳)

調査報告 ひたちなか市平磯町三ツ塚 13号墳の測量調査 (田中 裕・一之瀬敬一)

調査報告 飯塚前古墳の調査—測量・地下探査報告— (稲田健一・梅田由子・金田明大・三井 猛)

横穴墓を歩く⑭ 山畑横穴群 (大谷 基)

1ケース・ミュージアム 37 古代の塩づくり

1ケース・ミュージアム 36 馬渡埴輪製作遺跡発掘 50年

遺跡めぐり 千葉県龍角寺古墳群探訪

ひたちなか市の古墳⑥ 大平古墳群・殿塚古墳群・金上古墳

歴史の小窓⑮ 那珂川で地曳網

ほか



写真撮ったら、お茶でも
飲んでったらよかっぺよ〜

私たちが虎塚古墳を守っています

中根地区ときわ会の清掃活動

ひたちなか市の虎塚古墳って、人家の少ない森の中にあるのに、いつもきれいに掃除されていると思いませんか？ 実はこれ、地元の方たちが毎月二回、お掃除をしてくれているからなんです。そのように大事に大事に虎塚古墳を守ってくれているのは、地元である中根地区のときわ会の方々です。今回は、国史跡を守る縁の下の力持ち的な、ときわ会の活動をご紹介します。

中根地区ときわ会は、健康・奉仕・友愛・親睦をモットーとする、生きがいづくりの会である、とのこと。現在、会員は六〇人ほどで、最高齢はなんと九四歳！らしいです。昭和六〇年頃から市教育委員会の委託を受けて、虎塚古墳の清掃活動を続けてきました。月二回、五日と二〇日ごろの土・日を中心に、虎塚古墳のお掃除をしてくれています。ときわ会全体のメンバーによる草刈りは、年三回ほど行います。散らかっているゴミ集め、草刈り機などによる草刈り、のこぎりや脚立を使つての枝切り、秘密兵器(?) エンジン芝刈り機による芝刈り、このほか、することはたくさんあります。取材した日も、皆さん汗を流しながら作業をこなしておられました。いつもありがとうございます。

清掃終了後のお楽しみは、みなさん大好きなお茶の時間です。「仕事(取材)はいいから、あんたもここに座ってお茶していきなよ。ほら、お菓子もたくさん食べな。」そして私は断りき



たばこのポイ捨ては
禁止だかな！

もっと木を切っても
いいんじゃないの？

ゴミは持ち帰ってくんねーと
カラスがいたずらすんだよな～

公園なんで
ベンチがもっとあつといいんだけどな～

れず、その場の雰囲気にもみ込まれていくのでした・・・

虎塚古墳は地元の誇りだというお話をうかがいつつ、みなさんからの要望も聞きしました。「カラスがゴミ箱の中からゴミを引きずり出して散らかしてしまいうのでゴミ箱を撤去するか蓋をしてほしい。」「駐車場にたばこの吸い殻が目立つので、『ポイ捨て禁止』の看板を立ててほしい。」「もう少しベンチを置いてほしい。」「関東近県にはもっとPRしてもいいのではないか。」「立木をもっと切ってもよいのではないか。」などなど、いくらかでもアイデアはできます。ときわ会の皆さんから、虎塚古墳を大切に守っていきたいという気持ちが伝わってきました。史跡虎塚古墳は、こうして次の世代に受け継がれていくのでしょうか。



歴史の小窓 その一五

那珂川で地曳網

那珂川では昭和



三七年頃まで、サケ地曳網漁が行なわれていました。那珂川を見下ろす、ひたちなか市三反田下高井遺跡からは、古墳時代後期から奈良時代の大型管状土鍾が多く出土し、それはサケ地曳網の鍾ではないかと考えられています。

写真は七世紀後半の第二〇四号住居跡から出土した大型管状土鍾のひとつですが、表面の一部が荒れています。

漁網は、網地に直接浮子や鍾をつけるのではなく、それらを網に付けたものを網地の上下にとりつけて使用します。また網に付けた鍾が動かないように、前後を糸で固めることが多くあります。そのため地曳網の鍾は、引きずられることによって、一定の部分が水底との摩擦によりすり減ってしまします。大型管状土鍾にみられた表面の荒れは、この鍾が地曳網の鍾であった証拠なのかもしれません。

(佐々木義則)

参考文献 大沼芳幸一九九〇「正伝寺南遺跡出土の漁網鍾について」『正伝寺南遺跡』滋賀県教育委員会



展示のようす

古代の塩づくり

日時 平成27年
7月25日[土] ▶ 9月13日[日]

休館日 月曜日（祝日の場合は翌日）
開館時間 午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
入場無料

場所 ひたちなか市理蔵文化財調査センター
〒312-0011 茨城県ひたちなか市巾着 3499
☎ 029-276-8311



大田原郷土史
ひたちなか市立歴史・文化・スポーツ公社
1 CASE MUSEUM Vol.37
夏休み向け展示

昨年度実施した「ふるさと考古学」講座（小中学生向けの考古学講座）では、土器を使った塩づくりの実験を行いました。今回の展示はその様子を紹介しながら、ひたちなか市武田西塙遺跡から出土した製塩土器について考えてみました。

土器を使った塩づくり 茨城県の奈良・平安時代には、「製塩土器」をつかい塩づくりをしていました。塩づくりは、まず海水を日にさらして濃い塩水をつくります。次にその濃い塩水を土器を使って煮つめると「粗塩」ができます。そして複数の土器の粗塩をひとつの土器にまとめてさらに焼いていくと、土器のなかで固まった「堅塩」になります。できた堅塩は、土器に入れたまま、あるいは土器から外されて、人々のもとへと運ばれていったのです。

塩づくりの場所はどこ？ 製塩土器は日立市北部の海岸に近い遺跡から多く出土しています。塩づくりの遺跡はまだ発見されていませんが、おそらく海辺にあったのでしょう。日立市北部の海岸で塩づくりが行われた理由は、山が近くて塩づくりの燃料となる木材をかんたんに手に入れることができたうえ、製塩土器の材料となる粘土も取れる場所であったからです。また、つくられた塩を運ぶための駅路が海岸近くを通ることも重要なことでした。ひたちなか市武田西塙遺跡から出土した製塩土器も、材料となった粘土や土器の形などからみて、日立市北部の

海岸地帯から運ばれたものである可能性があります。

なぜ土器に入れて塩を運ぶのでしょうか？ 栃木県のような遠くまで、日立市から運ばれたとおもわれる製塩土器が出土しています。きっとその土器のなかには堅塩が入っていたでしょう。塩は空気中の水分を吸ってだんだんと湿ってきますが、土器は塩の水分を吸ってくれます。そのため土器に入った塩が用いられたといわれています。だから重いけれども、かなり遠くまで土器に入れたままの塩が運ばれたのだと考えられます。

（佐々木義則）

1

かたしお（堅塩）をつくってみよう。



2

濃い海水を煮る。



3

あらじお（粗塩）ができてくる。



あらじお（粗塩）をまとめて焼き、かたしお（堅塩）のできあがり。



みつづか ひたちなか市平磯町三ツ塚 13号墳の測量調査

田中 裕・一之瀬敬一



市内平磯中学校隣の三ツ塚 13号墳は、眼下に平磯海岸と広大な太平洋をおさめ、雄大な景色が楽しめる古墳です。今回、茨城大学で測量調査をしたところ、墳丘の長さが約 70 m であり、前方後円墳にしては前方部がとても短い、帆立貝のような形であることがわかりました。水田を作るのには適さない海岸部に、このような大きい古墳があることは、どうして古墳が築かれるようになるのかについて知る上で、とても重要な発見です。

1 はじめに

ひたちなか市は、装飾古墳として著名な国指定史跡虎塚古墳や、国指定史跡馬渡埴輪製作遺跡、県指定史跡十五郎穴横穴墓群など、中根町や馬渡町といった狭い範囲に所在し、古墳時代遺跡の宝庫といえる。これらは主に六〜七世紀（古墳時代後期・終末期）の遺跡であり、古代律令国家の成立と絡めて、全国的に注目されてきた。これに対し、上記の遺跡に先立つ五世紀の古墳は、あまり注目されてこなかった。磯崎町の市指定史跡川子塚古墳は、墳丘長八〇mの前方後円墳で、茨城県内有数の中期古墳であるが、虎塚古墳等から離れた臨海部に位置している唐突感があり、前後のつながりをうまく説明できないでいるのである。

五世紀（古墳時代中期）は、仁徳陵古墳など巨大古墳が多数築造され、「倭の五王」が中国南朝に朝貢した記録もあるなど、比較的、倭王権の動向が見えやすい時期である。茨城県石岡市の舟塚山古墳はこの時期のもので、近畿の巨大古墳に匹敵する大きさがある。ところが関東では、こうした極端に大きい古墳のかげで、じつは、古墳や集落遺跡が少なかつたり、



図1 三ツ塚 13号墳位置図

この時期だけ途切れていたりして、把握の難しい時期である事実はあまり知られていない。茨城大学考古学研究室では、こうした状況に對してなるべく穴のないデータで分析することを旨とした「古墳時代の村落領域と階層構成の実態―東関東における量的把握の実践―」（科学研究費補助金基盤（C）研究代表者・田中裕）という研究を、二〇一四年度から実施している。三ツ塚 13号墳の測量調査は、当研究の一環として臨海部の理解と五世紀の理解という二つの穴を同時に埋めることが期待されたことから、ひたちなか市総務部財務課及び教育委員会の協力の下、二〇一五年三月二日から一四日まで実施させていただいた。

（田中）

2 古墳の立地と測量の成果

三ツ塚13号墳は平磯海岸を臨む台地縁辺部、平磯中学校グラウンドの南（ひたちなか市平磯町三五五〇―四）に位置する（図1）。平磯海岸から阿字ヶ浦に続く台地の海岸縁には、磯崎東古墳群をはじめ多くの古墳が所在しており、三ツ塚古墳群は、磯崎東古墳群から海岸線沿いに続く一連の古墳群の南端に当たる。

三ツ塚古墳群の調査は、平磯中学校の建設や拡張を機に実施され（斎藤一九五二など）、平磯中学校校庭に存在した12号墳では、大刀や石製模造品などが出土するとともに、特徴的な壺形埴輪などが出土しており、五世紀前半代の築造と推定されている（白石二〇〇四）。また、2号墳や8号墳では、円筒埴輪や鉄鏃などの出土が知られ、鉄鏃の特徴から、前者が六世紀末、後者が六世紀前半の築造と考えられている（稲田二〇〇八）。古墳群の調査時に簡易な地形

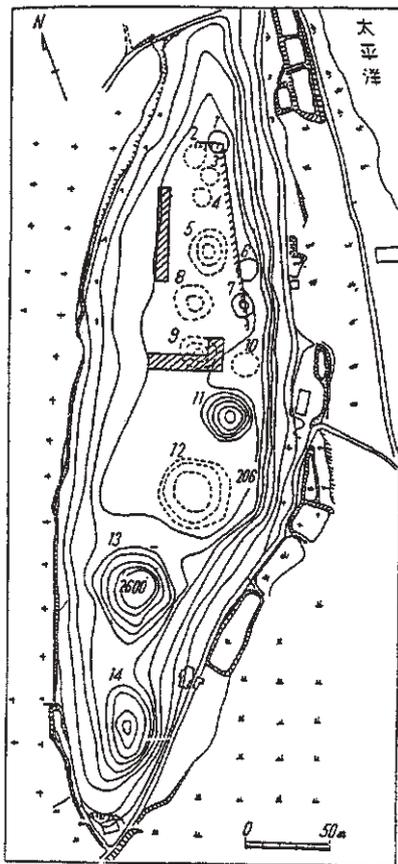


図2 三ツ塚古墳群全体図

測量が行われた際には、13号墳についても、墳丘南側に突出部らしい痕跡が記録されていたが、その解釈や墳長の評価は定まっていなかった（図2）。

本古墳の墳丘は現在、松などの雑木林となっており、適宜伐採を行いながら測量を行った。墳丘の北・東側には道路、北西側には倉庫や慰霊碑などがあり、墳丘は一部削平され、改変されている。また、墳丘南側には松食い虫薬剤駆除のための倒木置き場があり、測量できない部分があった。とはいえ、墳頂や斜面、突出部にかけての残り具合はよい（図3）。

墳頂部の標高は二四・五〇m前後である。裾部は、残り具合がよい部分で標高一八・五〇m前後と考えられることから、墳丘高は六・〇〇m前後になる。墳丘長は、前述のように削平や倒木の薬剤処理などにより正確な把握は困難ではあるが、測量できた範囲だけで現存長が六六mあり、後円部を円形に復原すると、七〇m程度まで墳丘は大きくなると推定できる。

後円部は北西側の削平が著しいものの、現存する部分から判断して、直径五四m前後の極めて均整のとれた円形と推定され、その南西側に前方部

様の突出部が構築されている。前述のように突出部の前端等がはつきりしないが、現況や測量図から推定すると、後円部径と前方部の比率は、前方部前端を長く見積もって3:1程度、短く見積もって4:1程度になるので、これらの比率から、本古墳は帆立貝古墳と考えられる。



三ツ塚13号墳

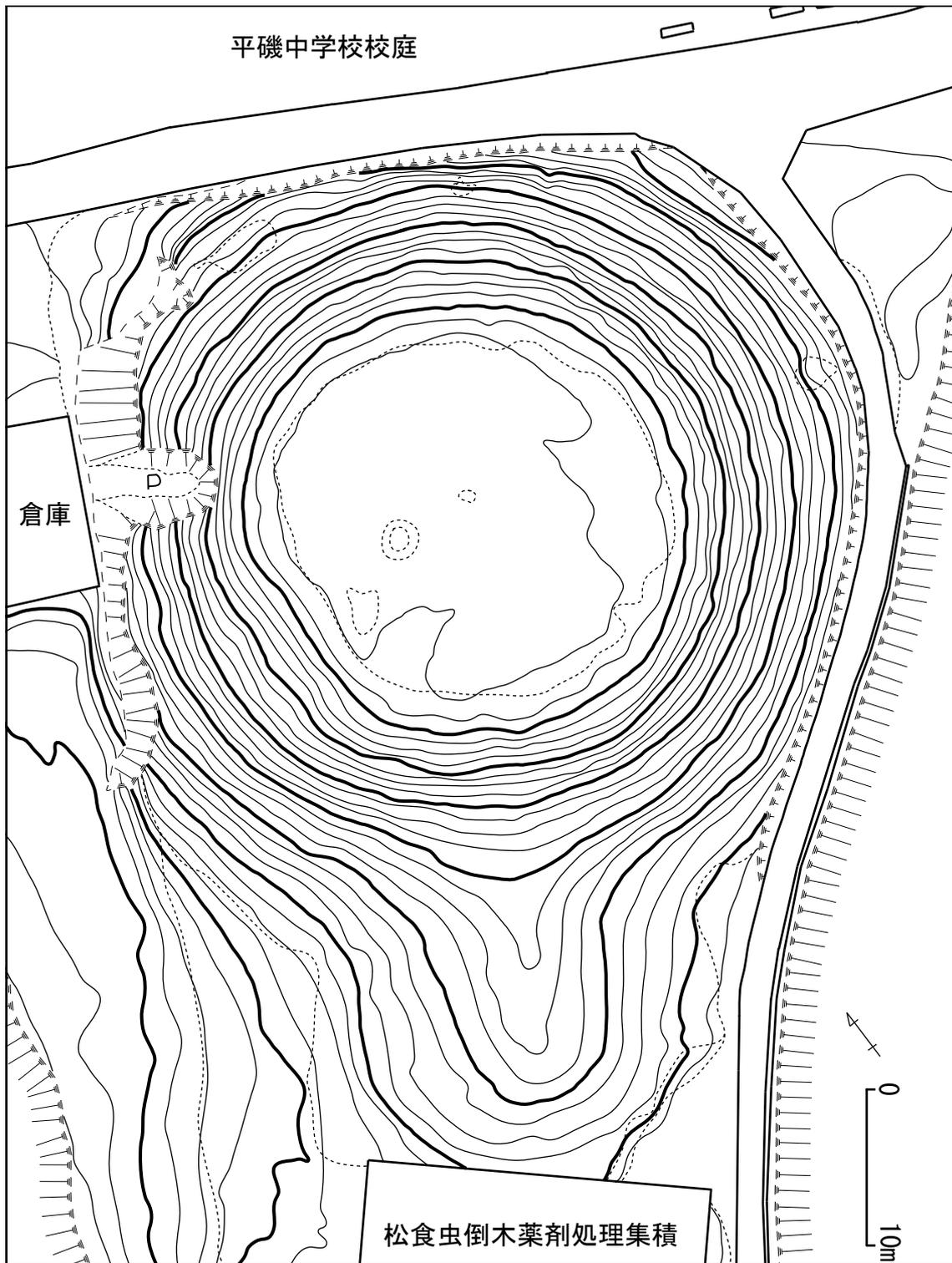


図3 三ツ塚 13号墳測量図



三ツ塚 12号墳出土遺物

三ツ塚 13号墳データ

現存長：66 m

復元長：70 m

墳丘高：6.00 m

後円部径：54 m

後円部墳頂径 22 m

後円部墳頂は極めて広く、現況で直径約二二m前後あることから、巨大な埋葬施設が存在しても不思議はない状況である。墳丘の傾斜については、現況や等高線からは変化する部分が観察できないので、等高線に表れない小規模の段築は否定できないものの、段築を有していない可能性が高い。また、削平部や墳丘上で川原石が露出している箇所があり、ピンポールによるボーリング調査成果からみて、墳丘平坦面と突出部以外の墳丘斜面に、人頭大から拳大の川原石からなる、葺石が存在すると推定される。墳丘北側の削平部分の土層を見ると、標高一九・六〇m前後に鹿沼パミスを含む層が存在することから、墳丘は地山削り出しの上に盛土を行い、その後、斜面に葺石をしたと考えられる。

表採遺物は多くなかったものの、埴輪片二点を採集できた。そのうち一点は頸部から口縁部にかけての部分とみられる埴輪片であり、三ツ塚12号墳に類例のある、特徴的な壺形埴輪の一部とみられる。頸部は直径一五cm程度に復元可能であり、内外面ともハケのちナデといった調整がある点も、12号墳出土のものとも類似する。これらの遺物の存在や、帆立貝古墳である事実から、本古墳も五世紀前半代の築造と推定される。

(一之瀬)

3 三ツ塚13号墳の歴史的意義

三ツ塚13号墳は、墳丘長七〇mに達する帆立貝古墳であり、五世紀代の築造である公算が高まった。本古墳は、外洋に面する海岸部の高燥な台地上にある。こうした臨海部にかくも大きい五世紀の古墳が存在するのが明らかになったことで、ひたちなか市域の古代史を考える上でも、列島の中で臨海地域が歴史上に果たした役割を評価する上でも、これまでとはずいぶん話が変わってくる。少なくとも、磯崎町の川子塚古墳は唐突に出現したのではまったくなく、その前から、海浜部に大型古墳を築造する集団が活動していたことが判明した。そして、これらの古墳は、海、それも外洋において活動する集団にとって重要なモニュメントであったという点についても、より明確になったと考える。つまり彼らは「海洋民」であり、かつ、全国的な古墳時代の秩序の中で、自らの役割を見いだした人々でもあったようである。

(田中)

参考文献

- 斎藤 忠 一九五二 『茨城県那珂郡平磯町三ツ塚古墳群調査報告』茨城県教育委員会
- 白石真理 二〇〇四 「ひたちなか市三ツ塚12号墳出土遺物について」『埴輪研究会誌』第8号
- 稲田健一 二〇〇八 「三ツ塚古墳群の鉄鏃」『ひたちなか埋文だより』第29号

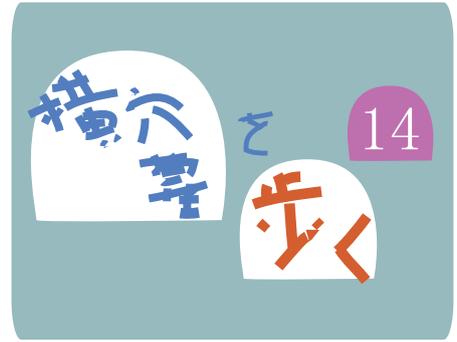
絵になる埴輪2



10月28日 ▶ 12月13日

ひたちなか市埋文だよりセンター

ワンケース・ミュージアム 38 「絵になる埴輪Ⅱ」
(ポスター・チラシには鎌田頭一氏の作品を使用しました)



宮城県大崎市
山畑横穴群

大谷 基

(大崎市教育委員会)

山畑横穴群は大崎平野南部、JR古川駅から南に約7kmの大崎市三本木蟻ヶ袋子山畑に所在する。周辺には青山横穴墓群、坂本館山横穴墓群、混内山横穴墓群など五つの横穴墓群も認められる。これらの横穴墓群は、大崎平野を東西に貫流する鳴瀬川の南岸、大松沢丘陵先端部斜面の凝灰岩層に造墓される。

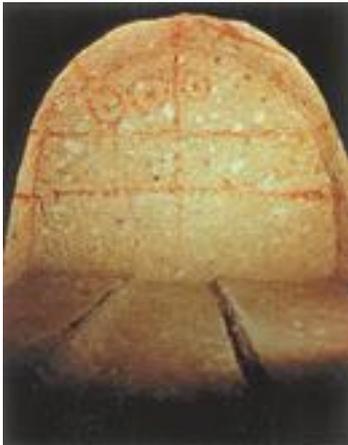
山畑横穴群を含めた横穴墓群は慶応二年(二八六六年)にその存在が出土品と共に指摘されていたが、年月の経過と共に忘れ去られていた。しかし、昭和四〇年代の高度成長期の開発工事に伴い次々と発見され、その存在が再認識された。

山畑横穴群は、昭和四六年の土取工事中に発見され、その翌年に宮城県教育委員会により発掘調査が行われた。調査では、家屋の棟や梁、柱など、同心円文や珠文が彩色された横穴三基を含む二六基の横穴が確認された。この調査成果により、装

飾古墳の北限をなすものとして昭和四八年一二月に国の史跡指定を受けている。また、遺体を納めた玄室には家形天井と、奥と左右の三方を一段高くしたベッド状の有縁棺座が認められる。この特徴は九州西部の肥後地方(熊本県)を中心に分布する「肥後型横穴墓」に類似するもので、直接的又は間接的な追慕技術の波及を示している。

出土遺物には、須恵器の坏や長頸壺、内面に黒色処理を施した土師器の坏や高坏などの葬送儀礼に伴う土器、鉄刀、鉄鏃の武器、ガラス小玉などの装身具がある。特徴的な品として、静岡県湖西窯跡産の須恵器の長頸瓶や平瓶、関東地方で出土する土師器の坏に調整や器形が近似する関東系土師器の坏が含まれる。横穴墓群の造墓年代は出土遺物から七世紀に造られ始め、九世紀代まで追慕されていたものと考えられる。

山畑横穴群のある三本木地域は、旧志田郡に位置し、六六三年の朝鮮半島における白村江の戦いに陸奥国信太郡生壬五百足という人が出征していることが『続日本紀』の記録から分かり、大崎地域でも早い時期に律令国家の萌芽となる新たな地方政策の支配下に置かれた地域と考えられる。横穴墓群に葬られた人々は、そ



山畑横穴群第15号墓の装飾
(宮城県教育委員会提供)



山畑横穴群発掘調査時の全景
(宮城県教育委員会提供)

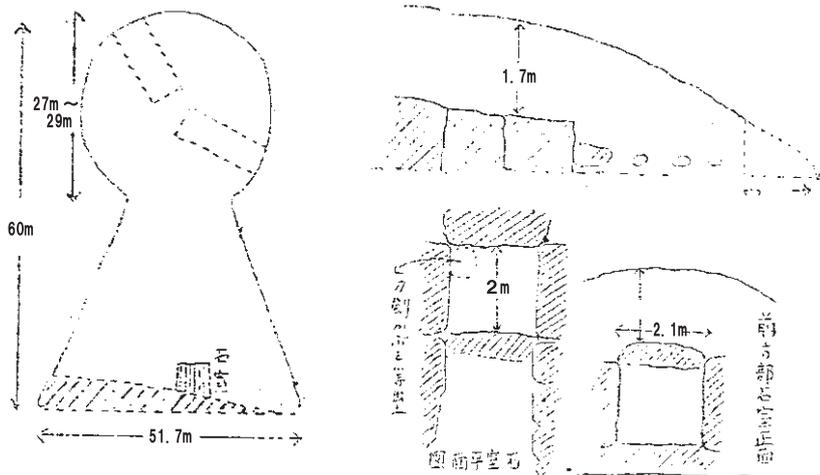


- 遺跡位置図
- ②混内山横穴墓群
 - ③寺下横穴墓群
 - ④坂本館山横穴墓群
 - ⑤青山横穴墓A群
 - ⑥青山横穴墓B群

の政策を担った集団であり、新たな地位や権力をもった集団と考えられる。



2 : 大平古墳群第2号墳 3 : 大平古墳群黄金塚古墳
5 : 金上古墳 1945年撮影



高柳忠正 1948「大平遺跡調査報告」『史窓』第1号 水戸第一高等学校史学会に掲載された図面



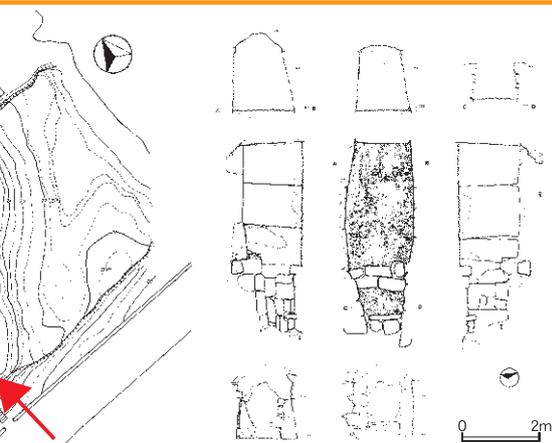
乳飲み児を抱く埴輪



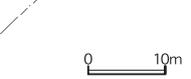
大平古墳群黄金塚古墳



馬具



石室



大平古墳群第1号墳



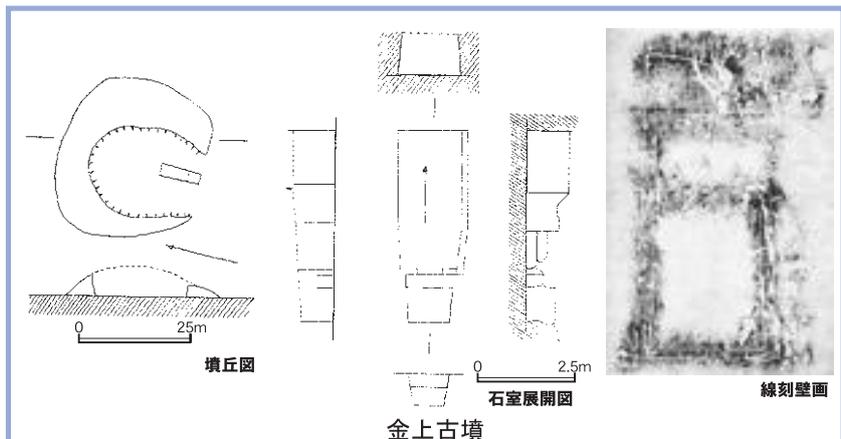
横穴式石室



大平古墳群第2号墳



殿塚古墳群第1号墳



墳丘図

石室展開図

線刻壁画

見学ガイド

- * 大平古墳群第2号墳と殿塚古墳群第1号墳以外の古墳は、現存していません。
- * 大平古墳群第2号墳と殿塚古墳群第1号墳は私有地内にあるため、道路からの見学となります。
- * 大平古墳群黄金塚古墳や大平古墳群第1号墳から出土した遺物は、ひたちなか市埋蔵文化財調査センターの標本陳列室に展示しています。

ひたちなか市の古墳

6 大平古墳群・殿塚古墳群・金上古墳

ひたちなか海浜鉄道湊線 金上駅の東側には、大平古墳群や殿塚古墳群、金上古墳がありました。

大平古墳群は、中丸川を見下ろす台地縁辺部に位置しています。1945年に撮影された空中写真には、前方後円墳3基と円墳数基が写っています。これらの古墳の大半が1955年前後の開発により消滅しており、詳細は不明です。全長約60mを誇る黄金塚古墳も、1956年の開発により消滅しています。1948年の水戸第一高等学校史学会の報告によると、墳丘には埴輪列がみられ、前方部に横穴式石室があることが記録されています。石室内からは、大刀片や馬具が出土しています。古墳が壊されたときには数多くの埴輪が出土したとされ、その時出土したものには「乳飲み児を抱く埴輪」も含まれます。「乳飲み児を抱く」といった造形の埴輪は日本でただ一つしかない貴重な埴輪で、茨城県の指定文化財になっています。この埴輪発見の経緯については、14ページのコラムに掲載しました。1983年には、円墳の第2号墳の一部が調査されました。第2号墳は、直径約27m、高さ約4.5mで、調査区からは武人埴輪の腕の一部などが出土しています。埋葬施設は不明です。1985年には、前方後円墳の第1号墳の発掘調査が行われています。第1号墳は、一部が削平を受けていましたが、調査により全長約48m、高さ約5mの規模であることがわかりました。埋葬施設は黄金塚古墳同様に前方部に位置しており、凝灰質泥岩の板石を使用し、平面形が胴張り形状を呈する長さ約5mの横穴式石室でした。石室床面には小石が敷いてありました。石室内部からは、銅釧、刀子、鎌、馬具、鉄鏃、玉類が出土しています。墳丘に埴輪は確認されていません。

当古墳群は、前方後円墳3基を含む市内最大規模の古墳群で、6世紀後半から7世紀前半にかけて造営されたものと考えられます。また、当古墳群の特異性として、2基の前方後円墳の埋葬施設が後円部ではなく、前方部にある点があげられます。

殿塚古墳群は、大平古墳群と小さな谷津を挟んだ北側に位置しています。古墳の数は不明ですが、現在台地縁辺部に第1号墳の1基が残っています。この古墳は1994年に調査が行われ、直径約28m、高さ約3mの規模であることが判明しました。墳丘からは、円筒埴輪や形象埴輪が出土しました。埋葬施設は、横穴式石室であることが判りましたが、詳細は未調査のため不明です。時期は、6世紀後半と考えられます。

金上古墳は、勝田第一中学校の北側に位置しています。当古墳は1955年に一部が破壊され、残っていた石室を1959年に調査しています。調査により、直径約30mの円墳で、埋葬施設は横穴式石室であることが判りました。石室は板石を組み合わせたもので、全長約5mを測ります。出土遺物には、大刀や鉄鏃、馬具、玉類があったとされますが、現在確認する事は出来ません。時期は7世紀前半と考えられます。当古墳の特徴は、東側壁に線刻による靱が描かれていることです。靱の描写は水戸市吉田古墳と類似しており、虎塚古墳を考える上でも、重要な古墳となります。



金上駅
1：大平古墳群第1号墳 2：大平古墳群第2号墳
4：殿塚古墳群第1号墳 5：殿塚古墳群第2号墳



古墳全景（右が前方部）



ミニ知識

大平古墳群には、今回後円墳がありました。詳細はわかりませんが、石室があるという話があります。現在、

* 古墳の場所や市内の古墳の概要については、『埋文だより』第37号をご覧ください。

* 参考文献：大森信英・郡司良一 1964「勝田市金上所在古墳」『勝田市津田・西山古墳群調査報告』勝田市教育委員会
鴨志田篤二ほか 1994「殿塚1号墳の調査」『平成5年度市内遺跡発掘調査報告書』勝田市教育委員会

川崎純徳ほか 1984『大平古墳群』高柳忠正 1948「大平遺跡調査報告」

花園古墳の発見 一九八一（昭和五六）年に茨

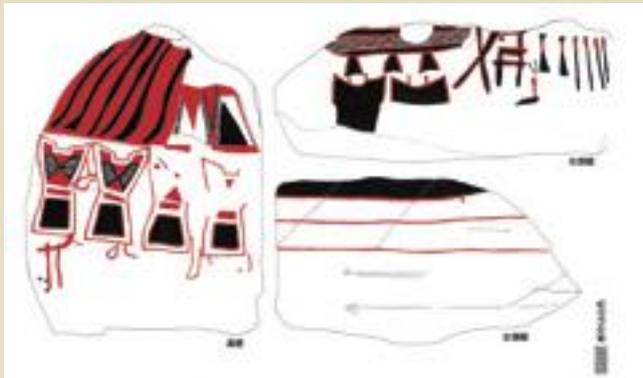
城原埋蔵文化財指導員をしてもらった伊東重敏氏から岩瀬町（現・桜川市）で装飾古墳が発見されたという情報が伝えられた。早速伊東氏と現地に急行した。地権者宅で乗用車の出入りに不便なので宅地内に進入路を作る作業中に古墳が壊され、横穴式石室が砕けてしまったと言う。石室の奥壁や側壁を束子で洗い植木の台に使っていたと言うのである。たまたま埋蔵文化財のパトロール中の県の文化財保護委員の目にとまり伊東氏に連絡が入ったのである。石室の石材はすでに町役場の駐車場に運ばれていた。

その後、大塚初重、川上博義、鴨志田篤二の各氏とも同所を訪れ花園古墳の壁画を実見した。伊東氏との話し合いで古墳の発掘調査は伊東氏が行い、壁画の実測は川崎が担当することとなった。古墳の調査は何回か見学した。墳丘はすでに削土されていたが一边22mの方形を呈し、3mの羨道部を有し、玄室は前室、後室からなる複室構造を呈していることが判明した。

壁画の実測には一週間を要した。石室石材のある駐車場に毎日通った。壁画の色彩はほとんど消失してしまっており、石材が乾燥してしまうと図柄そのものが正確に把握できない。霧をふきかけると図柄が浮き立ってくる。霧吹きを用意し水分を与えながらの実測となった。実測は驚きの連続であった。実測図は原図とトレースしたものを届け、伊東さんの発案で簡単な報告会を催すこと

出会い、別れ、そして夢考古学の旅路

第15回 岩瀬町の遺跡の調査 - 花園古墳の発見 -



川崎 純徳

花園古墳の壁画（川崎原図による）

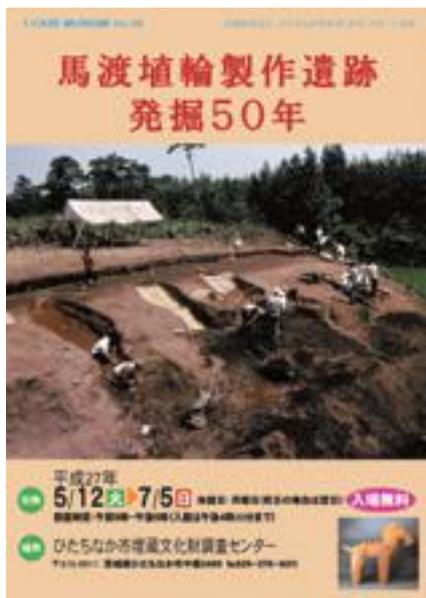
となった。町民に壁画の概要について報告した。大塚先生も講師としてお話しされた。その時の原図が行方不明になり書き込みの詳細が分からなくなってしまうたのは残念である。恐らくきれいなトレース図のみを保管し原図は廃棄されたのであろう。

花園壁画その後 壁画が描かれていた石室の石材は、その後穴を掘って埋め、土をかぶせた。町によればこれでも保存したと言うらしい。このことに関して新聞報道で知り、教育委員会に事情を聴いたが明確な回答はなく東京国立文化財研究所の指導に従ったとの二点張りであった。今でも壁画石材はそのままのようである。花園古墳群の一つで最大規模の古墳については、合併して桜川市となつてから星龍象さんが周堀の調査を行った。

長辺寺山古墳の踏査 たまたま県の埋蔵文化財パトロールの対象に長辺寺山古墳が該当することになり関係者で踏査をすることになった。古墳は昭和金属工業株式会社の所有地であり安全上立ち入りが出来ない。このためにほとんど踏査できないのである。関係者のお骨折りで踏査が実現した。保存状態は良好であり、合併後に測量調査をお願いしたのだが実現できていない。古墳の研究上からも測量は必要であることを改めて主張したい。

*川崎純徳氏のプロフィールは、連載第二三回（埋文だより）第四一号に掲載してあります。

*挿図は、水戸市立博物館 1990『特別展「装飾古墳」―地下を彩る名画の世界―』より引用しました。



ひたちなか市の国指定史跡の一つ、馬渡埴輪製作遺跡は、一九六五年に最初の発掘調査が実施され、それから五〇年が過ぎました。そこで今回の展示では、遺跡の概要を振り返り、その後の整理作業で確認された未報告の埴輪などを紹介しました。

発見の経緯 一九六四（昭和三九）年、勝田三中の生徒がユリの球根掘りの際に、偶然「馬形埴輪」を発見したのが調査の発端です。一九六五（昭和四〇）年、明治大学の太塚初重氏らが現地踏査を実施し、大規模な埴輪製作遺跡であることが判明しました。なお、発見の経緯については、『埋文だより』三四の「遺跡を見つけた少年たち」に掲載しています。

調査 一九六五～六九年に市教育委員会と明治大学により、七次にわたる調査を実施しました。さらに、一九八一（昭和五六）～八九（平成元）年に史跡範囲確認調査を実施し、その後

の調査も含めると、二二回の調査が実施されています。

調査の結果、四つの地区（A・B・C・D地区）で窯跡一九基、住居跡二基、工房跡一二基、粘土を採掘した跡二五ヶ所以上が確認されました。この調査により、粘土を採掘して、工房で埴輪を作り、乾燥させて窯で焼き上げるといふ、埴輪製作の一連の遺構を日本で初めて確認できました。この結果から、一九六九（昭和四四）年に国指定史跡となり、一九七八（昭和五三）年からは史跡公園として公開されています。

遺跡の概要 埴輪の生産は五世紀後半にC地区で始まり、ここで焼かれた埴輪は市内最大規模を誇る川子塚古墳に立てられたと推測されます。六世紀には、A・B・D地区の窯で埴輪が生産され、市内の笠谷古墳群や銚の宮古墳群に運ばれたと考えられます。

当遺跡の調査では、材料の粘土や赤色顔料の



B地区第1号窯跡



C地区第1・2号窯跡

ベンガラが出土し、併せて窯の構造も確認されたことから、埴輪製作の実態が判明しました。また、埴輪と伴に出土した土師器により時期が明らかとなり、そこから関東における人物埴輪導入期から終焉までの生産の変遷を明らかにした点で重要な遺跡とされています。

各地点の概要は以下のとおりです。

*C地区（五世紀末～六世紀後半）窯跡三基（一基は未使用）、工房跡二基。円筒埴輪、人物埴輪、動物（鹿）埴輪、家形埴輪が出土。

*B地区（六世紀前半）窯跡二基、工房跡一基。粘土採掘坑三基以上。円筒埴輪、人物埴輪、家形埴輪が出土。円筒埴輪は大型品。

*A地区（六世紀前半～後半）窯跡九基、工房跡九基、住居跡二基、粘土採掘坑一八基。円筒埴輪、人物埴輪（武人・農夫など）、円筒棺が出土。

*D地区（六世紀後半）窯跡五基。

（稲田健二）

千葉県龍角寺古墳群探訪

今回の遺跡めぐりは、千葉県栄町と成田市に位置する龍角寺古墳群を見学しました。古墳群探訪は、二〇〇九年度の埼玉県行田市の埼玉古墳群に続き、二回目となります。

当古墳群は、近隣の古代寺院の龍角寺とともに、一九七六年につくられた千葉県立房総風土記の丘史跡公園内に位置しています。見学では、七九基の古墳を間近に観察し、また、発掘調査に基づき、古墳がつけられた当時の約二六〇体



風土記の丘資料館での見学風景

の埴輪が並んでいる第一〇一号古墳を見学しました。さらに、方墳で一辺七八m、高さ一三mの古墳時代終末期では全国第一位の規模を誇る岩屋古墳では、その規模の大きさに参加者から感嘆の声が聞かれました。

(稲田健二)



岩屋古墳の石室の見学風景



第101号墳の復元された埴輪群

秘話 乳飲み児を抱く埴輪

ひたちなか市埋蔵文化財調査センターの標本陳列室には、非常に人気の高い埴輪があります。それは、茨城県の指定文化財の「乳飲み児を抱く埴輪」です。この埴輪は、一九五六（昭和三一）年秋に、市内大平にあつた黄金塚古墳から出土しました。古墳は全長約六〇mの前方後円墳ですが、残念ながら発掘調査されぬまま壊されてしまいました。しかし、幸運にもこの周辺を遺跡巡回していた井上義安氏によって、埴輪は保存されました。ここでは保存に至る秘話をご紹介します。井上氏は壊されている古墳を見て、何らかの埴輪があることに気がつきました。そこでプレハブで休憩していた作業員に尋ねること一時間、「実は」ということになって、床下からこの乳飲み児を抱く埴輪が出てきたのです。井上氏はすぐに埴輪を保存するために渡すように交渉しますが、なかなか渡す気配を見せません。そこであらためて清酒三本を持参してお願いすると、やっと申し入れにに応じてくれたそうです。今ではとても考えられないお話です。

もう一つの秘話は、この埴輪には子宝に恵まれる力があるようです。ただし、このお話、今のところ私の妄想かもしれません。

(稲田健二)



いづかまえ 飯塚前古墳の調査

—測量・地下探査報告—

稲田健一・梅田由子・金田明大・三井 猛



地下探査風景

市内三反田地区に位置する飯塚前古墳は、工事で破壊されるところを、協議の上、保存された古墳です。古墳の形は、長方形という大変珍しい形をしています。詳細な調査は実施されていませんが、工事の際、墳丘の東側で横穴式石室が確認されています。石室の確認された場所が、中央より東側と偏った場所にあるため、西側にもう一つの石室の存在が推測されてきました。今回はその石室の存在を、地下探査という方法で調査しました。

1 飯塚前古墳について

飯塚前古墳は、三反田古墳群に属し、那珂川を望む台地縁辺部近くに位置する。三反田古墳群は、東西約1kmの範囲に、羽黒支群・埜支群・上高井支群・蜷塚支群といった小古墳群から構成される古墳群である。古墳は、前方後円墳二基と円墳数十基が確認されている。前方後円墳二基は羽黒支群に位置し、第一号墳が全長約30m、第二号墳が全長約二三mを測る。飯塚前古墳は、当古墳群の西側に位置する。当古墳も単独で存在するのではなく、円墳数基が存在しているが、現在はほとんど湮滅している。飯塚前古墳についても、一九七二（昭和四六）年十一月に土砂採取のため墳丘東側の約五分の一が削られた段階で工事を中止し、保存された



図1 三反田古墳群と飯塚前古墳の位置図

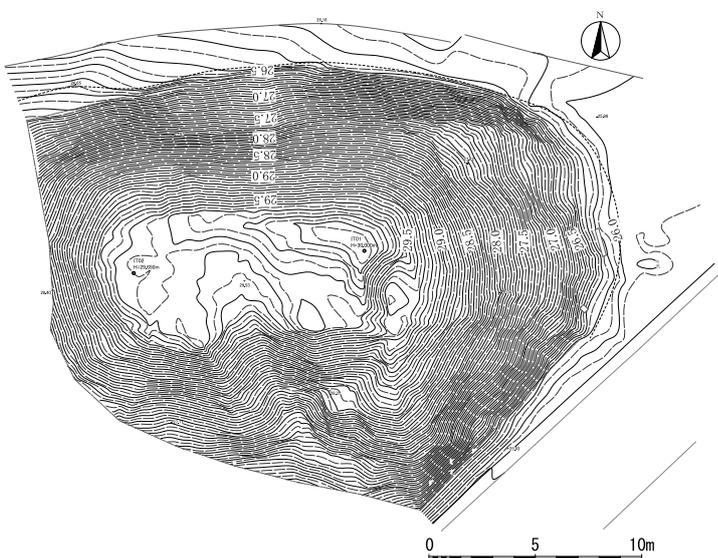


図2 飯塚前古墳墳丘測量図

経緯をもつ古墳である。一九七三（昭和四八）年には市の指定史跡となっている。墳丘は、大変珍しい長方形を呈し、東西約30m、南北約20m、高さ約3mを測る。墳丘から埴輪の出土はない。埋葬施設は、工事によって横穴式石室と思われる羨道部の一部が確認されているが、詳細は不明である。石室は南に向かって開口し、墳丘の中央よりやや東側に位置することから、西側にもう一つの石室の存在が推定されていた。そこで今回、墳丘の測量と地下探査を実施

し、西側の石室の存在の可能性を検討することとなった。(稲田)

2 測量調査と地下探査

今回実施した飯塚前古墳の調査は、古墳の石室の有無の確認を目的とし、発掘を行わない非破壊調査を実施した。

調査は、ひたちなか市埋蔵文化財調査センターと奈良文化財研究所埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室、そして有限会社三井考測の三者の共同研究によって実施した。

非破壊調査は、まず古墳の墳形を正確に知るための三次元遺跡調査測量を行い、その後地下探査レーダーにより遺構の地下探査を行った。いずれの技術も一般的な測量・探査技術を基に遺跡調査用に研究開発を進め特化させた技術である。

調査目的 飯塚前古墳は前述の通り珍しい長方形の墳形をした古墳であり、主体部石室が墳丘中央部より東側に位置していることが推定されていることから、墳丘西側にもう一つの主体部の存在が示唆されている。

今回の調査は、本古墳の主体部が西側にも存在するのか。その規模はおおよそどのくらいであるのか。この二点を主目的にしている。そのため発掘せずに調査が可能な地下探査による遺跡探査を行う運びとなった。

地中の遺構を知るためには、発掘調査が一般

的であるが、海外の考古学調査においては地下探査技術を応用した遺跡探査(事前調査)を実施し、その後発掘調査(本調査)を実施する事例が増加してきている。

測量方法 三次元微地形調査測量は地表面踏査を微地形計測の理論(三井二〇〇九)に基づき計測記録を行い解析することで、地形の微細な凹凸から人為的地形改変跡を読み取り遺跡の有無を推定する考古学的計測調査法である。

一般的にシャドウマーク法による微地形の調査は、目視や写真撮影によって微地形の凹凸を判読するのであるが、日本では特有の自然環境から樹木や草が多く繁茂するため、航空写真等からの地表面の判読は出来ず一部の草地や作付前後の畑地以外での利用は困難とされてきた。

この三次元微地形調査測量は広義での地下探査方法の一つと考えることができる。

具体的には、トータルステーションを使用した測量技術を使用して、考古学的調査方法に基づいた数量分析法と属性分析法が可能な計測点を分類した三次元計測を行う。

数量分析法による計測方法は計測する測点は人為的主観を排し、定間隔の距離で計測を行う。この時計測対象が遺跡であることから計測点の密度を〇・五m×一・〇mにして測定する。

属性分析法による計測は、地表面の微細な凹凸を地形分類して測定記録すると共に、遺構形状や遺物が確認された場合それぞれ属性分類し

計測を行う。

この数量、属性分類された各々の計測データを同時解析することで、人の目だけでは判読不可能な微地形によるシャドウマークが表示判読できる三次元等高線図を作成する(図3)。測量面積は調査範囲約五〇〇m²中、墳丘残存部約四五〇m²を属性分類計測点一七一点、数量分類計測点五一一点の合計六八二点を計測した。計測密度約一・五測点/m²である。

探査方法 遺跡の地下探査は、国内では奈良文化財研究所により一九六一年から本格的な遺跡探査の研究が開始され、日本の国土特有の地盤や土壌環境においての実証実験がなされ、多くの成果が報告されている。

地下探査 レーダーによる調査は東西に〇・五m間隔に測線を設置し(図4)、測線上にレーダーを走らせて探査を実施した。この探査方

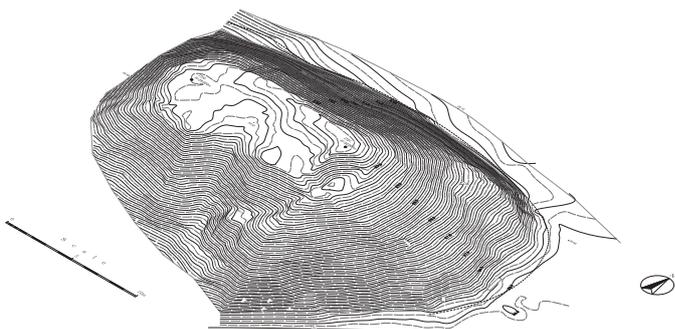


図3 飯塚前古墳3D鳥瞰図(南東方向角)

法は地中の状況を高密度に探査することで古墳を構成する盛土と石室の石材等異なる物質の境界部分における電磁波の反射を区別することが出来る。今回使用したレーダーの電磁波は五〇〇MHzであり、探査が可能な深度は約二・五m程度までである。

探査結果は、三次元微地形計測結果と照合させ測線上で断面図を作成し、探査結果のプロファイル断面図と共に図化表記を行った。

調査成果 微地形測量の結果(図2・5)、墳丘南東角付近から東面にかけて元々の墳形に伴わない人工的な規則性のある法面形成と掘削跡の地形の乱れを認めた。これは、土取り時の埋め戻し痕跡と推定できる。

墳丘南面には墳丘中央に位置する法面に後世の古墳に上る小道(祠に至る参道)を確認した。また、この

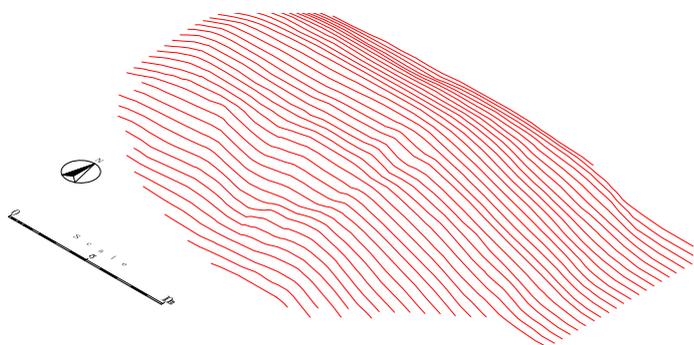


図4 飯塚前古墳探査測線3D鳥瞰図(南東方向角)

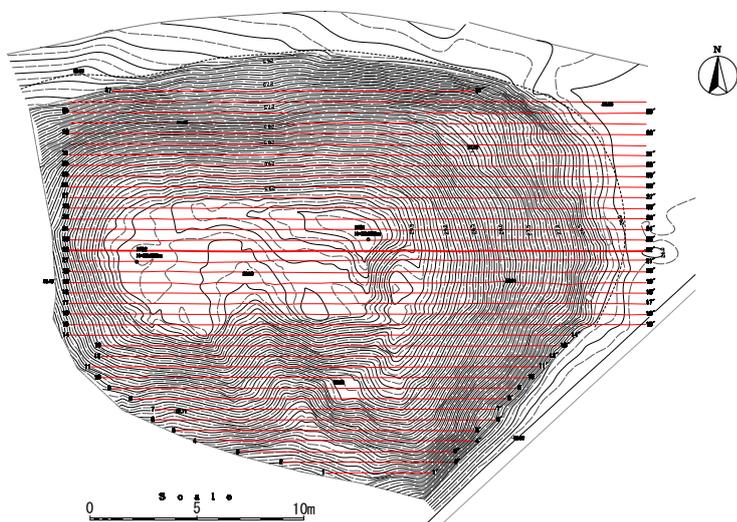


図5 飯塚前古墳地中探査測線図

小道の両面には尾根状形状の中心部に若干の窪みがある。特に西側の法面には古墳主体部羨道部上部地形を思わせる微地形が表れている。地下探査レーダーの結果は、プロファイルデータから墳丘南面より墳丘中央にかけて東西約一三m南北約九・五mの方形範囲に石室の石材と推定される電磁波の反射が見られる。この反応は墳丘の北面には見ることが出来ない。深さは、墳頂地表面より約三五n地下の所から下方に強い反応が見られる。

図5の探査測線図は図4の探査測線鳥瞰図を

平面表記し、微地形図上に測線を表記した平面図である。特に太い赤線で測線位置を表記した部分を図6のプロファイル断面図で表した。断面(図6)

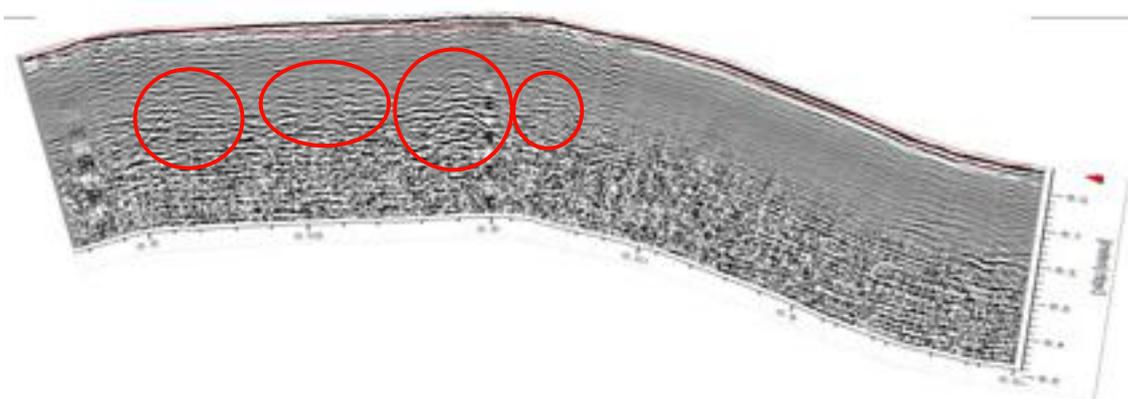


図6 飯塚前古墳地中探査プロファイル断面図

中の赤丸で示している所が強い反射の反応である。石室に相当すると推定できる。石室の反応は墳丘北面には無く、墳丘南面から中央にかけて墳丘東面より西面までの広い範囲で確認できることから、

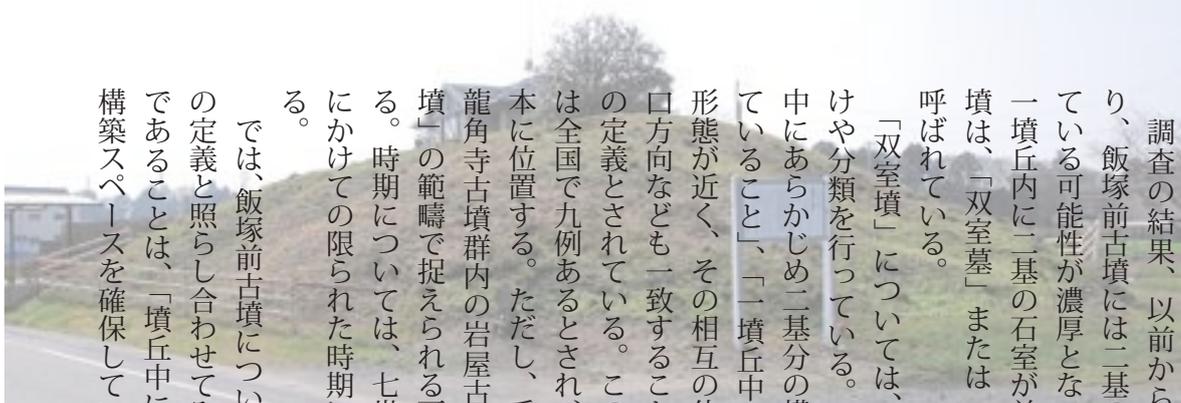
南向きに開口する石室が二基並んでいる可能性があると思われる。(三井)

3 「双室墳」について

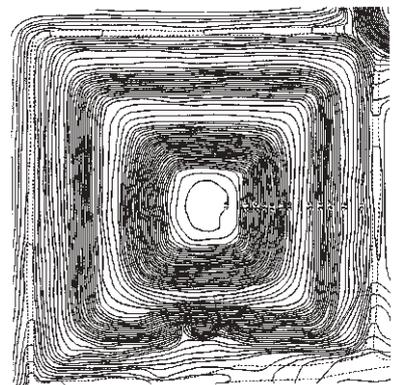
調査の結果、以前から推測されていたとおり、飯塚前古墳には二基の石室が並んで存在している可能性が濃厚となった。このように、同一墳丘内に二基の石室が並列して配置される古墳は、「双室墓」または「双室墳」なる用語で呼ばれている。

「双室墳」については、楠元哲夫氏が定義づけや分類を行っている。それによると、「墳丘中にあらかじめ二基分の構築スペースを確保していること」、「一墳丘中の二基の石室の規模・形態が近く、その相互の位置が対照となり、開口方向なども一致すること」の二点が「双室墳」の定義とされている。この定義に合致する古墳は全国で九例あるとされ、これらはすべて西日本に位置する。ただし、千葉県栄町に位置する龍角寺古墳群内の岩屋古墳については、「双室墳」の範疇で捉えられる可能性が示唆されている。時期については、七世紀第二四半期〜中葉にかけての限られた時期に営まれたとされている。

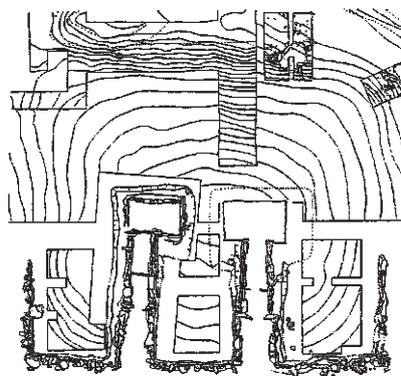
では、飯塚前古墳について楠元氏の「双室墳」の定義と照らし合わせてみる。墳丘形が長方墳であることは、「墳丘中にあらかじめ二基分の構築スペースを確保している」という定義と合



致し、測量と地下探査から石室が並列して南側に開口している可能性が示唆された結果については、「開口方向なども一致する」という定義に合致する。ただし、石室の規模などの定義については、発掘調査を行っていないため判断できない。よって、現時点では当古墳を楠元氏が定義する「双室墳」と断定することは出来ないが、その可能性は十分にある考えられる。すると、当古墳の時期も七世紀中葉という時期となろう。「双室墳」については、類例も少なく、不明な点も多い。楠元氏は「双室墳」について、「一墳丘に埋葬する対象を二人と限定的に設定した上で、あらかじめ墳丘・石室を造作した墓」と規定し、その背景には「地域支配機構の再編整備という政権中枢の政策的意図による、墓制の再編成を伴う被葬者数の限定策のもとに出現した」としている。また、この規定が適用された範囲は「畿内域を大きく超えることはなかった」としている。そのため、飯塚前古墳の出現理由にこの背景を当てはめることは難しく、今後さらなる検討が必要となる。(稲田)



千葉県岩屋古墳 (S=1/1800)



石川県須曾蝦夷穴古墳 (S=1/400)

図7 同一墳丘内に2基の横穴式石室をもつ古墳例

参考文献 大塚初重一九七九「飯塚前支群」『勝田市史 別編Ⅱ 考古資料編』勝田市史編さん委員会／金田明大・西村康二〇〇七『埋蔵文化財ニュース』一七七奈良文化財研究所埋蔵文化財センター／鴨志田篤二・武石晃明一九九九『飯塚前古墳発掘調査報告書』ひたちなか市遺跡調査会／鴨志田篤二・武石晃明一九九九『三反田飯塚前古墳』『市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会／草野潤平二〇〇八『千葉県龍角寺岩屋古墳の石室系譜』『地域と文化の考古学』II明治大学文学部考古学研究室／楠元哲夫一九九四『一墳丘内複数横穴式石室の諸問題』とくに「双室墳」等にあられる終末期墓制の特質について『舞谷古墳群の研究』(財)由良大和古代文化研究協会／西村康二〇〇一『遺跡の探査』『日本の美術』至文堂／三井猛二〇〇九『微地形測量による遺跡調査の有効性について』『常総台地』一六号常総台地研究会

*調査・報告にあたり、加藤千里氏とナワビアハammad矢麻氏にご協力いただきました。

協会事前説明会／12 岩宿友の会
見学／14 高野小 6 年生社会科見
学／14-15 市毛上坪遺跡・小谷金
東遺跡試掘調査／15 勝倉城跡試
掘調査終了／19 ふるさと考古学
①「楽しい考古学」(講師・さかい
ひろこ氏)／ときわ会虎塚清掃作
業／20 ふるさと考古学②「ちよっ
と昔にタイムトリップ1」(講師・
石井聖子氏) ↓



24 黒澤春彦氏・亀井翼氏 (土浦市上
高津貝塚資料館) 資料調査 (広知貝塚縄文土
器)／24-28 黒袴遺跡・岡田遺跡
試掘調査／25 ワンケースミュ
ジウム37「古代の塩づくり」開始／
26 ふるさと考古学③「暮らしの考
古学」(講師・佐々木義則)／30 坂
上和弘氏 (国立科学博物館) 資料調査 (入
骨)



31 李素妍氏 (鳥取大学) 資料調査対応
【ベンガラ】 ↓



8月
2 ふるさと考古学④「色の考古学」
(講師・稲田健一)／5 北茨城市教
員研修／6 ひたちなか市中央図書館
史跡めぐり見学／8 ふるさと考
古学⑤「顔の考古学」(講師・戸坂
明日香氏) ↓



9 夏休み研究質問対応／18・19
佐野中学校 2 年生職場体験／19
茨城県教育財団埋蔵文化財調査研
修／21・27 臼井克夫氏より資料
寄贈 (三反田蛭塚遺跡縄文土器)／25-30 博
物館実習 (茨城キリスト教大学・京都府立大学)
9月
2 橋本勝雄氏 (千葉県教育振興財団) 資料
調査 (孫目遺跡槍先形尖頭器) (下段右写真)

入館者状況 (2015.4.1.～2015.9.30)

月	開館 日数	個人		団体		計 (人)
		(人)	(団体)	(人)	(団体)	
4月	26	488	6 (1)	202 (112)	690	
5月	27	293	8 (4)	431 (252)	724	
6月	25	216	7 (6)	627 (605)	843	
7月	27	276	8 (1)	374 (150)	650	
8月	26	292	16 (2)	200 (8)	492	
9月	26	252	6 (0)	129 (0)	381	
合計	157	1817	51(14)	1963(1147)	3780	

○内は学校数

ひたちなか市埋蔵文化財調査センター及び
(公財)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社が
開催する事業は「ひたちなか市報」及び下記の
ホームページでお知らせいたします。
<http://business4.plala.or.jp/h-lcs/>

2-18 地蔵根遺跡試掘調査／10 水
彩サークル「遊画」資料写生／13
ワンケースミュージアム37終了
／14 ふるさと考古学⑥「土器の
考古学1」(講師・綿引逸雄氏)／
14-18 東原遺跡・堀口遺跡試掘調
査／17 水彩サークル「遊画」資料
写生／19 日立市HB会見学／22
山崎友也氏 (明治大学生) 資料調査 (三反
田蛭塚貝塚貝輪)／26 水戸市すみよい
見川を作る会見学／27 ふるさと
考古学⑦「ちよっと昔にタイムト
リップ2」(講師・石井聖子氏)／
29 金上遺跡試掘調査開始／30 雷
遺跡試掘調査開始

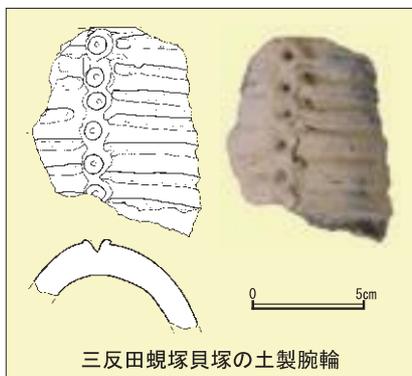


編集後記の
笑う埴輪

今夏は「女子大生と装身具」の撮影プラン
がないままに博物館実習を迎えたのだが、不
思議なことがあるもので、実習期間中に土製
腕輪の寄贈を受けた。多量の土器の破片に混
じって収納されていたのにも関わらず、いき
なり目に飛び込んできたのだ。これは「撮影
しなさい」という啓示か。控えめには、「撮
影した方が良いと思われる」ほどの、誘惑の
巡り合せとなった。

土製腕輪の破片の大きさは、長さ92mm、幅
75mmで、重量は134g。内径は、正円に近いも
のとして復元すると、70mmほどに推定される。
平行する沈線間の隆起がベンケイガイ製貝輪
を表現し、連なる六点相当までが残存する。
表面の色調は灰白色に近い。

腕輪は両面テープで腕に装着し、剥がれて
落下した時のために、下にはクッションを敷
いた。実習生三人をモデルに、頬杖を規定演
技として、各自の自由演技も撮影する。そ
れが当人
にとって
幸か不幸
かは別に
して、採
用を決定
する苦悩
にまた耐
えなけれ
ばならな
い。



三反田蛭塚貝塚の土製腕輪



ひたちなか埋文だより 第43号

2015年10月31日発行

編集 公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

発行 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター

〒312-0011 茨城県ひたちなか市中根3499 ☎029-276-8311 FAX 029-276-3699

印刷 株式会社 高野高速印刷

表紙のモデルは速水祐佳さんです。